
マイアール皇国記 魔人復活編（二章のみ）

オリオン

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

マイアール皇国記 魔人復活編（二章のみ）

【Nコード】

N1713B

【作者名】

オリオン

【あらすじ】

闇の魔法使い組織ギルドに所属する四人の男女は、依頼を受け、騎士を護衛する事に…待ち合わせの宿屋では、さっそく敵の攻撃を受けたのだが…

第二章 前半（前書き）

ここには、全三章の内の二章のみを前半と後半に分けて掲載したいと思います。物語の発端を描く第一章。そして、興奮の結末を描く第三章。を含めたこの作品は、書籍になっています。「マイアール皇国記 魔人復活編（文芸社刊行税込み1050円）」は、全国の書店から注文する事が可能です。

第二章 前半

第二章 前半

その子供達をちよろい獲物だと思ったことが、山賊どもの不運だった。

夜道を歩く二人の子供。これを見て、危険を感じるほど慎重な奴なら、山賊などになりはしない。

「おい、ガキ、止まりやがれ！」

山賊の一人が、ぞんざいな言葉で呼び止めた。

「何かご用ですか？」

二つの小さな影のうちの一つが、か細い声で答えた。その声は、女の子のものだった。

荒くれ男たちは、内心ニンマリしていた。なぜなら、女の子の方が町で高く売れるからだだった。

場所は峠の山道。山賊は、前に三人、後ろに一人で、二人の逃げ道を阻んでいた。獲物は絶体絶命のはずだ。もっとも、その子らが獲物だった場合だが…。

山賊の頭らしき男が、二人に近づく。もちろん、相手はまるつきり無害な存在だと信じていたから、全くの無警戒、隙だらけで無造作に近づいた。

そして、それはアツという間の出来事だった。山賊の目の前から、女の子とおぼしきほうが消えたのだ。

それが、いきなり真横に現れた。

その娘は、手に狩猟用のナイフを持っていた。背が低い彼女は、狙う急所が限られている。そして、選んだ場所は、男に取っては急

所中の急所だった。そこを、決る。

いきなり頭を殺された山賊達は、暫くの間、呆然としていた。しかし、それも束の間だ。すぐに事の重大さに気づくと、剣を引き抜いた。

「畜生！親分の仇だ！」

こんな台詞を吐くキャラが、仇を取れた試しがない。

案の定、少女の腕の一振りで片付けられてしまった。山賊の喉には、それぞれ毒針が刺さっている。

山賊は、ただの死体になった。

少女の名前はリサリタ。連れはクリス。

二人は、何事もなかったかのように歩き出していた。

夜の帳つむぎが降り、真っ暗な中を旅する。二人にとっては、カンテラの灯りだけが頼りという心もとない道中だった。

「リータ、組織の連中は人使いが荒いよね。前に仕事したの、二日前だよ！もう次？」

クリスが、リサリタに愛称で話しかける。先程の山賊の襲撃は、二人にとっては話の種にもならない出来事らしい。

二人の服装は、修道僧が着ているものと同じだ。暗闇の中で黒い服は、闇に溶け込むのにぴったりだった。ただ、二人とも色白なので、顔がかえって目立ってしまう。

「二日間も休めただけありがたく思いなさい」

リサリタが、姉のような口調で窘たしなめる。彼女は、カンテラの灯りに気を遣いながら、二人の足元を照らしていた。

「油、持つかしら？」

ひとり言のように呟くりサリタ。

クリスは、そんな彼女に質問をぶつけた。

「ねえ、どこまで行くの？歩くの疲れたよ！」

クリスが駄々をこねる。リサリタは、ちよつと眉をしかめた。しかしクリスは、そんな事くらいじゃめげない。

「リータ、もう歩けない！気持ちは歩きたいけど、足が動かない！」
クリスは、その場に座り込んでしまった。

「もう少しなんだから、わがまま言わないでよ」

リサリタの言葉に、クリスは疑いの目を向けた。

「本当に少しなの？いつまで経ってもあと少しじゃ、誤魔化されな
いよ！」

クリスは、えらく生意気な口を利いた。その態度は、リサリタの許容範囲を超えそうだったが、なんとか耐えた。

「わかつてる。今までクリスのこと、騙したことある？」

クリスは、腕を組んで考え始めた。

「一度もない……」

「そうでしょう？」

クリスは、突然立ち上がると、リサリタの手を引っ張って歩き出した。

「それなら早く行こう！」

二人は、夜道を急いだ。

リサリタが言った通り、目的地は近かった。山の中腹に建てられた一軒の小屋が、彼らの目指す場所だった。二人がそこに辿り着いた頃、カンテラの火は消えかかっていた。

「よいお月夜でございます」

リサリタは、入り口の戸を叩きながら呼びかけた。

しかし、今夜は月などは出ていない。

しばらくすると、中からはこんな質問が返ってきた。

「今夜は満月かい？」

「いいえ、三日月です」

リサリタが答えると、小屋の戸が開いた。

出迎えたのは、体格のいい若い男だ。

彼は、リサリタを見て驚いていた。白い肌の美少女が、黒い僧服を身に纏^{まと}っている姿は、ちよつと幻想的だった。それは、人を惑わすために出てきた夜の妖精を思わせる。

「なんで子供が合言葉を知ってるんだ？お前たち、迷子か？」

首を傾げている男に、リサリタは聞いた。

「コーディーさんでしょ？」

「それじゃ、あんたがリサリタか？」

リサリタとコーディーは、お互いをまじまじと見つめていた。

コーディーは、相手の華奢な体付きを見て、その戦闘能力を疑った。女としても、確かに美人ではあるが、彼にとっては細すぎる。コーディーの好みは、もつと胸と尻の大きな女だ。それに、歳も十以上には見えなかった。はつきり言って、コーディーのリサリタに対する第一印象は、悪かった。

一方、リサリタのほうも、コーディーを品定めしていた。

厚い胸板、太い腕、なかなか力もあり、それでいて、敏捷^{びんせう}に動けそうな体をしている。全体的な雰囲気は、猫科の猛獣を思わせる。黒い髪を長く伸ばし、後ろで纏^{まと}めていた。整った顔にはピアスが三つ。耳に二つ、唇に一つ。茶色の胴衣に紺色のズボン。ブーツとベルトは蛇革だった。

彼は、武器になるような物は何も身に付けていないようだ。

「合言葉は合ってたんだから、中に入っただいいんでしょ？」

リサリタは、招き入れてくれる様子がないコーディーに痺れを切らしていた。

許可も得ず、勝手に上がり込む。

彼女は、コーディーのことを「気が利かない奴！」

などと思っただが、表情はにこやかだ。彼女みたいな性格だと、暴れだした時が怖い。

小屋の中には、テーブルと椅子があつた。

そこには、別の男が座っている。こちらは、背が低く小太りだ。顔も丸顔で愛嬌がある。しかし、顔とは裏腹に手の方は、立て掛けてあつた片刃の長剣に伸びていた。

コーディーが、男に呼びかけた。

「タックス！味方だ！」

タックスと呼ばれた男は、剣を放した。そして、今度は居眠りを始める。

「奴の名はタックス。俺の相棒だ！ほとんど寝ていることが多い」「変わってるのね……」

「そうでもないさ、ただ、普通のひとより五時間ぐらい多く寝るだけさ！」

リサリタは、鼾いびきをかいている男の、幸せそうな寝顔を観察した。ちよつと豚に似ている。ただし、賢そうな豚だ。

「そんなに寝てて、脳味噌が腐らないの？」

この女、顔に似合わず言うことがキツイ。

「おいおい、俺の相棒の特技は、睡眠中でも人の話を聞いていることなんだぜ！」

リサリタは、慌てて口を押さえた。しかし、出た言葉は戻らない。「それって本当？」

「ああ、俺は嘘と子供は嫌いなんだよ！」

（まあ、どうでもいいや！）

リサリタは、こんなふうに思っていた。

気を取り直した彼女は、自分のパートナーであるクリスを、コー

デューに紹介することにした。

「この子が、あたしの相棒のクリス」

当のクリスは、リサリタの背中にしがみつき、怯えた目でコーデューを眺めている。

「こんにちは、坊主」

コーデューの挨拶に、クリスはこくりと頷いた。

「何だよ！ずいぶんと元気がないじゃないか？」

クリスに話しかけたのに、答えるのはリサリタだ。

「人見知りするのよ、すぐに馴れるわ」

何だか情けない気分になってきたコーデューは、大きくため息をついた。

「まあいいや、仕事の話しようぜ」

コーデューがタックスの隣に座ると、リサリタ達もその向かい側に座った。テーブルの上にある蠟燭が、四人の男女の顔を照らす。

彼ら四人は、裏の傭兵団とも呼ばれる地下組織、ギルドのメンバーだった。もともとは、大商人仲間が汚れ仕事をさせるために造った武装集団だったが、今では独自の活動を行っている。その活動とは、商隊の護送、要人の警護、借財の回収、戦の助っ人、暗殺、などだった。彼らの多くは、特殊能力を持っている。いわゆる魔法と呼ばれるものだ。そのため、世間から迫害され、下手をすると火炙りにされそうな連中が集まっていた。そんな異端者達を訓練するのが、この組織の特徴だった。

立派な戦士に成長した彼らは、数人のチームを造って仕事をする。今回は、二つのチームが組んで、一つの仕事をすることになった。

「おい、あんたは仕事の内容を聞いているんだろ！ 早く説明しろよ！」

コーデューの口ぶりでは、リサリタを完全に格下だと思っているらしい。もっとも、相手が小娘とおしめの取れないガキにしか見え

ないので、彼がそう思っても仕方がない。

しかし、リサリタ達にとっては、仕方がないではすまない。

「ずいぶん乱暴な口を利くのね、命令される覚えはないけど……」

リサリタは、それほど怒った様子も見せず言った。

「悪かったねお嬢ちゃん！ これでいいんだろ！」

不貞腐れた態度をとるコーディー。これには、リサリタ本人よりも、彼女の相棒のほうが腹を立てた。

「教えてください。が抜けてるよ！」

クリスは、先ほどまでのオドオドした様子がまるでない。食って掛からんばかりにコーディーを睨みつけている。まるつきり人格が変わったかのような。

「このガキ！」

コーディーが、勢いよく立ち上がった。

クリスは座ったままだったが、睨み付けるのは止めない。

「コーディー、何が不服なの？これから協力していく間柄なのに……」
あくまで冷静な話し方をするリサリタを見て、コーディーの気分も多少は収まってきたようだ。そこで、本音をぶちまけた。

「女や子供と一緒に仕事ができるか！あんなら、足手まといなんだよ！」

リサリタは、何も言い返さなかった。ただ、財布から金貨を一枚だけ取り出すと、指で弾いた。テーブルの上に落ちた金貨は、回転しながら踊っている。

コーディーは、その金貨に気を取られていた。すると、いつの間にか目の前のリサリタが消えている。そして、何の気負いもない贅し文句が、彼の背後から聞こえてきた。

「動く喉を切り裂くよ」

コーディーが立ち上がった時に引いた椅子の上に、彼女はいた。背もたれに腰を下ろし、コーディーの喉にナイフを当てる。冷たい刃の感触が、コーディーの心と体を縛った。

「タックス！」

タックスは、相棒の叫び声を聞いて目を覚ました。そして、刀を取って立ち上がるうとする。しかし、立ち上がれない…。

立ち上がれない理由は、椅子から尻が離れないからだ。さらに、床から椅子もくっついていて、びくともしない。タックスは、両手をテーブルに付いて体を持ち上げようとする。両腕に渾身の力を込め、力んだ。顔を真っ赤にして頑張るが、無駄な努力だった。懸命に立ち上がるうとしているタックスの目の前で、クリスは大欠伸をしていた。

タックスが立ち上がれないのは、クリスの能力によるものだ。

「わかった、降参だ。仕事の内容を教えてください」

コーデイーは、仕方なさそうに言った。

それに対して、リサリタとクリスは声を揃えた。

「え？聞こえない！」

コーデイーは、悔しそうに言い直した。

「教えてください…」

コンケスの町

翌朝、山小屋を出た四人は、東の方角へ向かった。

彼らは、コンケスの町を目指していた。その町にある「王冠亭」という名前の宿屋に、カイルと言う名の騎士が泊まっている。そのカイルの指示に従うこと。それが、組織から出た命令だった。

四人の旅人は、その日の夕方頃には、目的地に辿り着くことができた。

そろそろ、カラスがねぐらに帰ろうかという時刻だった。マイアール皇国の宿場町、コンケスは、行きかう人々で賑わっていた。

「なかなか発展しているんだね。旅人が多いのかな？」

修道衣の少年が、町の往来を見て無邪気に喜んでいる。彼には、他に三人の連れがいた。

「三本の街道が交差しているんだもの、賑わうはずよ」

三人のうちの、少年と同じ服装の少女が答えた。修道士みたいな二人は、クリスとリサリタだ。コーディーとタックスも、ちゃんとして来ている。

街道沿いには、屋台が並んでいた。お腹が空いた人には、厚切りパンに豪快に具を挟んだサンドイッチ。喉が渴いた人には、地酒。そんな飲食ができる所が、幾つも軒を連ねていた。

クリスは、いつの間にかサンドイッチを頬張り、それを葡萄酒で流し込んでいた。

「酔っぱらっちゃ駄目よ！」

リサリタが、心配になって話しかける。

「大丈夫、これくらいの揺れならなんとかなる！」

地震なんか起きていないのに、クリスは揺れを感じているらしい。

「しっかりしなさい！ クリス！」

リサリタが、襟元を掴んで揺さぶるが、当の本人は目をとろろんとさせていた。顔色も悪く、返事をしようとしなない。

「こいつは、どうしちまつたんだ？」

コーディーが、クリスの顔を覗き込む。

「知らないわよ！ただ、酒を飲んだら急にぐったりしちゃって！」

「お子ちゃまなんだから、酒なんか飲ませるなよ！」

コーディーに怒鳴られたリサリタは、よほど頭に來たらしく、その場でクリスを突き放した。そして、言い返す。

「たった一杯しか飲んでないのよ！」

「わかったよ。それより、そいつを何とかしてやろうぜ！」

リサリタに突き放されたクリスは、穿き捨てたズボンみたいに路上で倒れていた。

彼女は、慌てて抱き起こす。

「ごめんなさい、クリス。すぐにベットで寝かせてあげるから…」

彼らの目の前は、ちょうど宿屋だった。『紅い鳩亭』これが宿屋の名前だった。

「この子だけ、ここに泊めましょう」

リサリタの提案に、コーディーが反対する。彼の意見は、こうだ。目的地の『王冠亭』を探して泊める方が、手間が省けるだろ！」

「じゃ、そこを探すまでの間、あなたがクリスを背負ってくれる？ 背中に吐いちゃうかもしれないけど」

コーディーは、しばらく沈黙していた。

「いや、病人を連れ回すのはかわいそうだ…」

コーディーは、リサリタの意見にしぶしぶながら同意した。それに、ある考えが浮かんだので、リサリタに押し切られた事も悔しくなくなった。

結局、クリスは、『紅い鳩亭』に泊めておくことにした。リサリタは、彼に付き添うことになった。従って、『王冠亭』に向かうのは、コーディーとタックスの二人だけだ。

「明日の朝には行くから、待っていてね！」

リサリタとコーディーは、固い約束を交わし、別れた。『紅い鳩亭』が遠ざかると、コーディーが呟く。

「やっと邪魔っけな連中と別れられる」

晴れやかな顔のコーディーに、タックスが聞いた。

「だって、どうせ一緒になるだろ？」

コーディーは、悪戯っぽく笑った。

「いや、急な出来事が起きて、早く出発することもあるだろ？」
「なるほど！」

タックスは、感心していた。彼にも、コーディーの考えが理解できたようだ。

二人は、『王冠亭』の場所を道行く人から聞きだすと、急いでそ

こへ向かった。できれば、今夜のうちに依頼人と共に出発してしまいたい。彼らは、そう思っていた。図らずも、それは現実となったのだが…。

コンケスの町の中央に位置する大きな宿屋、『王冠亭』は、なかなかの賑わいを見せていた。それに、今は夕食時でもある。

宿の造りは、石造りの三階建てだ。横に長く、ちよつとした貴族の別荘を思わせた。スレートの屋根に出窓。入り口の所には、屋号である王冠の形を模った看板が取り付けてあった。

コーディー達が入り口の扉を開けた時、テーブル席はほぼ満席状態だった。『王冠亭』の一階は、食堂と酒場を兼ねている。人が泊まるのは、二階と三階だ。

「まったく！ どいつがカイルつて野郎だ！」

コーディーは、店内を見回しながら叫んでいた。

人が多く、ガヤガヤうるさい上に、店員が忙しそうに飛び回っている。その全てが、彼の神経を逆撫でしていた。

「カイルつて人は騎士だろ、騎士をさがせば？」

タックスが、ぼそりと言。

普段は寝ていることが多く、顔立ちも冴えない彼だが、なかなかいい指摘をする。

「騎士なんて人種は、そうそういるもんじゃないから、すぐに見つかるよ。そうイライラしなさんな」

タックスは、いい指摘の追加をした。

コーディーの切れ長でキツそうな目が、タックスのぼんやりとした小さな目と合う。

「ふん、わかったよ。クールになるよ！」

どうやら、コーディーという名の暴れ馬の手綱を握っているのは、タックスらしい。

さて、冷静になったコーディネーは、店内にいる騎士を探した。店内に騎士は二人。窓側の奥のテーブルと、壁側の奥のテーブルだ。壁側の騎士は、従者を一人連れてきている。窓側の騎士は、一人きりだった。

「どつちだと思う？ タックス」

コーディネーの問いに、タックスは面倒くさそうに答えた。

「君が決めていいよ」

全権を委任されたコーディネーは、壁側の騎士を選んだ。二人を見比べると、壁側の騎士のほうが、身なりが良くて金持ちらしく見えるからだ。どうせなら、依頼人は金持ちのほうがありがたい。

コーディネー達は、騎士のいる所へ近づく。すると、早くも騒動が持ち上がった。

騎士の従者が、立ち上がって来たのだ。

「おい、その二人！ 男爵様に近づくんじゃない！」

目の細い、中肉中背の男だった。こげ茶色の地味な旅装に、マントを羽織っている。そんな彼が、まるで野良犬でも追い払うかのよくな態度をとってきた。

コーディネーの頭の中で、線が二、三本、音を立てて切れた。彼のブレイキ役を務めるはずのタックスは、もう起きて活動するのに限界のところまでできているらしく、立ったまま、うつらうつらしていた。

コーディネーは、いきなり胴衣を脱ぐと、それを従者の頭からすっぽり被せた。

「ううあ、何をする！」

目の前が真っ暗になって慌てている彼に、急所蹴りを喰らわす。かわいそうに、従者はその場でうずくまった。そして、そのままピクリとも動かない。ことによると、去勢された？

「ああ、すつとした」

コーデューは、快便後のような、実に晴れ晴れとした顔をしている。従者に被せた胴衣を取り戻す。すると、相手は口から泡を吹いて気絶していた。何もここまでやることはないのに……。

「ちえっ、ばっちな！」

舌打ちするコーデューを、従者の主人である男爵は、じつと見つめていた。それは、怒りでもなく、恐れでもなく、哀れみでもなかった。ただ、蛇のような冷たい目で、目障りな若僧を見つめている。しかも、そうしながらも食事を中断しない。肉をナイフで切っては、フォークで口許へ持っていく。

爬虫類を思わせる目、面長な顔、鼻筋が通っていて、口髭がある。けっしてブ男ではないが、人に好かれるタイプではない。背が高く、ひよろりとした体形。従者が気絶するまで叩きのめされても、平然と食事を続ける男。コーデューは、何だか得体の知れない恐怖を感じていた。

男爵は、口許をナプキンで拭った。ぶどう酒で口を濯ぐ。そして、話しかけた。

「君は何者かね？」

コーデューは、即座に答える。

「名乗るわけにはいかないね！」

威圧感に押されながらも、はつきりとした口調で拒否した。

一方、拒否された男爵のほうは、（信じられぬ）といった表情をしていた。

「君は馬鹿かね？」

「何だつて！ 口には気をつけるよ！ あんたもこの男みたいになりてえか？」

コーデューは、床で気絶している従者を指さした。

男爵は、コーデューの脅かしには動じない。ゆうゆうと、食後の満腹感を楽しんでいるようだった。

「滅多なことをいうもんじゃないよ！ それに、人の従僕を半殺し

にしておいて、名前も名乗らず詫びも入れずで、世の中が通ると思っ
ているのか？」

目上の者から世間の常識を諭さとされる若者は、大抵の場合は反発す
る。コーディーも、もちろん、例外ではない。

「今までは通ってきたぜ！ おっさん！」

睨み合う二人。一触即発の危機だ。

その時、険悪になりつつある二人の間に、割って入った人物がい
た。

「コーディー、謝るんだ！」

コーディーに頭を下げさせようとしているのは、タックスだった。
立ったまま熟睡するという人間離れした技を行っていた彼も、周り
の騒々しさに目が覚めた。

見ると、依頼人もかもしれない騎士と、コーディーが言い争っている。
「とにかく落ち着け！ まったく、ろくなことをしないんだから！」

タックスは、相棒に目で合図を送った。『あとは自分に任せるよ
うに』と。コーディーは、それに従った。

「申し訳ございません、立派な殿様に対して、連れがご無礼いたし
ました」

タックスは、愛想笑いを振りまく。

「私は、コルロイの物産問屋で、名前をデン・ルシアと申します。
こっちの馬鹿は、私の弟で、ハルロイ。」

エルザードへ砂糖の買い付けに行くところなのですが、なんせか弱
い商人のこと、道中の安全が危ぶまれます。そこで、騎士の方を護
衛に頼んでおいたのです。その待ち合わせ場所がここでして…。そ
れで、あなた様に近づいたわけです」

タックスは、揉み手をしながら嘘八百を並べ立てた。

確かに、相手の正体もわからないのに、こちらの素性を明かすわ
けにはいかない。

横で見っていたコーディーは、自分が馬鹿と紹介されたのも忘れて、

ただ、ひたすら感心していた。

「つきましては、貴方様のお名前を教えてくださいませんか？」
下手に出ているタックスを、男爵はジロリと睨んだ。

「お前、商人のくせに、立派な剣を差しているな」

タックスの腰には、一メートル弱くらいの刀が差してあった。緩いカーブを描いて反り返っている片刃刀だ。

「はは、ほんの護身用のお飾りで…」

タックスは、冷や汗をかいていた。目の前にいる男に、プレッシャー威圧感を感じていたからだ。男爵は、横柄な態度で言う。

「残念だが、お前に名乗るわけにはいかないな。だから、そちらが探している人物の名を聞かせてもらおう」

タックスは、依頼人の名を告げていいかどうか迷った。しかし、告げなければ話が先に進まない。

「え」と、カイル様で…」

タックスは、相手の表情を探った。男爵は、なぜか薄笑いを浮かべている。

「ワシの名ではないな。たぶん、窓際に座っている若者ではないかな？」

男爵は、そちらへ向けて顎をしゃくる。タックスは、何度も礼を言いながら、その場を離れた。

「くそ！ 偉そうにしゃがって！」

怒りを露わにするコーデー！

「あいつ、何様のつもりだ！ 頭に来るだろ？ タックス！」

タックスは同意を求められたが、今の彼はそれどころじゃない。

男爵の薄笑いの意味が気になって仕方がなかった。

広い店内だったが、窓際までは数歩の距離だ。そこには、食事を終えた若い騎士が、窓の外を眺めていた。テーブルの片隅には、エメラルド色のミンクがうずくまっついていて、やっぱり窓の外を眺めている。その様子は、星空をうっとり眺める恋人同士のようだった。何だか邪魔しづらい雰囲気なのだが、話しかけないわけにはいかな

い。

「あの〜」

今度は騒動が起きないように、最初からタックスが声をかけた。もう、彼の瞼は閉じそうなのだが、あと少し辛抱しなければならぬい。

「何か、ご用ですか？」

それは、優しい声だった。若い騎士が、星空から目を離してこちらを向く。彼は、底抜けに人がよさそうな顔をしていた。ただし、愚純な顔というわけじゃない。無邪気で人懐っこい、どこか、人を安心させる顔立ちだ。

目は黒色で大きく、世間の悪習に触れてない輝きがあった。つやつやの栗色の髪を短く刈り込んでいるのは、寺院騎士団デンプルのメンバーであることを示していた。

がっしりとした体には、革製の鎧を付けていた。腰に吊るした剣は、騎士の間でピュラーな、両刃の長剣だ。十字型のシンプルな物で、装飾品はついていない。

「あなたが、カイル様で？」

カイルかと問われた騎士は、タックスの顔をじっと見つめた。

「じゃあ？ 君たちはギルドの人？」

「ええ、そうです」

タックスとコーデーは、カイルの向かい側に座った。その途端、タックスは猛烈な勢いで眠り始めた。

「この方は、どうなされたのです？」

カイルの問いかけに、コーデーは素っ気なく答える。

「疲れたんだろ！」

相手が不機嫌そうにしているので、カイルはそれ以上の質問を躊躇ためらった。

しばらく、気まずい空気が流れる。

「それで、あなたの依頼は何なんだよ！」

コーデーは、えらく尖った物の言い方をした。たぶん、男爵と

の経緯が頭の中に残っているのだろう。しかし、そのことと依頼人であるカイルには何の関係もない。つまり、これはコーデীর八つ当たりだ。

カイルは、相手の態度を気にすることなく、用件を話し出した。

「私と一緒にこのミンクを守りながら、クロテニアへ行つて欲しいのです。クロテニア公国領のガイアール城へ」

コーデীরは、小さなミンクに、ちらりと目を向けた。それは、非常に珍しい色をしている。

そのミンクは、体がエメラルド色で、目も同色だった。ふさふさの尻尾をパタパタと動かし、首を傾けてこちらを見ていた。

「こいつの名は？」

ミンクからカイルに視線を移して、コーデীরが尋ねた。

「レディー・エルシーク様です」

「はは、イタチにしては立派な名前だな！これは、公爵様へのお土産かい？」

「そうです…」

「これを持って行つて、仕官の口でも見つけるのか？」

「はい…」

カイルの言葉は、齒切れが悪かった。しかし、コーデীরは、そんな様子には気づかないようだった。タックスが起きていれば、必ず不審に思ったに違いない。

「ギルドへ金は払えるんだろ？」

「ええ、それは大丈夫です」

「よし、引き受けた！」

コーデীরは、簡単に仕事を請け負う。カイルは、それを見て、ちよつと不安になっていた。

「エルシーク様を狙っている連中がいるので、旅先で絶対に襲ってきます。しかも、かなり手強い相手ですけど…」

コーデীরは、胸の前で腕を組んだ。そして、上体を反らして椅

子の背もたれに体重を預ける。その態度は、えらく傲慢だ。

「ふざけるな！ このコーディー様を守る以上、あんたも、そのイタチも、すでに目的地にいるのも同然だぜ！」

コーディーは、いつの間にか機嫌を直していた。元来、本能的で単純な性格だ。

彼は、につこり笑って握手を求める。カイルが手を伸ばすと、その手を強く握り締めて言う。

「商談成立！ 夜明け前に出発だ」

そして、急に腹が減ったらしく、給仕にバンバン食い物を注文した。

タックスは、相変わらず眠り続けている。

エルシークを狙う刺客

午前十二時、『王冠亭』は寝静まっていた。一人の男が、二回の廊下を足音も立てずに歩く。彼は、左端にある203号室を目指していた。そして、その部屋の前で止まった。

男は、何もない空間に両手をかざした。すると、両手の平の先に、火の玉がひとつ出現する。その火の玉は、大きさを増し、人の頭くらいまで成長した。

辺りが照らされ、術者の顔も暗闇の中にハッキリと浮かんだ。彼は、男爵の従者だった。食堂でコーディーに叩きのめされた男だ。「お返しだ」

彼は、ドアに向かって火の玉を投げつけた。破壊されたドアが、破砕音とともに砕け散る。部屋の中に飛び込んだ火の玉は、その体を100倍にも膨らませ、あつという間に辺りを火の海にする。

「ふん、悲鳴も上げられずに燃え尽きたか」

その炎を見て、満足気に呟く従者。しかし、意外な所から返事が

あつた。

「誰か死んだのかい？」

従者に声をかけたのは、コーディーだった。彼は、すぐ側に立っていた。そこには、タックスもカイルも無事である。カイルの肩には、エルシークも乗っていた。つまり、誰も損害をうけていない。目を見開いたまま固まってしまった従者に、コーディーは語りかけた。

「あんた、凄い男だ。尊敬するよ。それだけの魔法力を持っていたら、食堂で叩きのめされた時に使いたくなる筈だ。それを、自分の正体がばれないように力を見せずに我慢するなんて…あんたは一流だよ」

それは、コーディーの口から出たとは思えないほど、謙虚で神妙な言葉だった。

従者は、褒められてもちっとも嬉しくなかった。ただ、怒りだけが込み上げた。

「くそつたれ！ 殺してやる！」

従者は、再び火の玉を出現させた。

「へへ、一流のあんたを殺せる俺は、その上つてことだ」
やはりこの男、ただでは褒めない。

コーディーは、腕を振り上げた。その手には、透明な手斧が握られている。

従者が火の玉を大きくするだけの暇を与えずに、その頭へコーディーが手斧を叩き込む。頭を割られた従者は、うめき声を上げて倒れた。頭の傷からは、血が吹き出ることにはなかった。なぜなら、傷口が凍っていたからだ。

「これで一丁上がり！ さうて、男爵の野郎も締めちまおうぜ！」
勢いづくコーディーが振り返ると、そこには当の男爵が立っていた。十歩ほど離れた場所で、腕を組んでいる。

「どうやら、あんたも死にたいらしいな！」

コーデューは、男爵の方へ近づいて行く。

「それ以上接近すると、避けきれないよ」

コーデューの足が止まる。男爵が、右手を差し出した。

「紅蓮の竜！」

男爵の右手から、炎が噴出した。それは、コーデューに向かって真っ直ぐに飛ぶ。

「氷壁！」

コーデューは、目の前に氷の壁を出現させた。

男爵の右手から出た炎は、帯状に長くなり、巨大で異形のドラゴンへと変化した。ドラゴンの形をした炎は、氷の壁に襲い掛かる。

紅蓮の竜は、瞬く間に氷壁を粉碎した。しかし、その向こう側には誰もいない。

コーデューはおろか、タックスやカイルまで存在しない。紅蓮の竜は、悠々と宙を飛び、辺りを照らす。廊下の端まで行って、ウターンして戻って来る。しかし、ネズミー匹いやしない。

「消えたのか？」

男爵は、考え込むように呟いた。

そんな時、彼の後ろである変化が起きた。それは、空間に歪みが生じたのだった。歪みの中心からは、刀身が突き出された。振り返った片刃の剣だ。剣は、空間を真一文字に切り裂く。切り裂かれた場所は、パツクリと口を開いた。そこには、タックスの丸顔があった。

彼の能力は、刀で空間を切り裂き、異空間へ入ることができた。そして、その中を移動して、別の場所へ出ることができる。

「げっ！」

てっきり男爵の後ろを取ったと思っていたタックスは、当人と目

が合っているので驚いた。男爵は、予め自分の後ろに出てくると予想していたらしい。

「なるほど、たいした手品だ！」

男爵の手が、タツクスの刀を無造作に掴んだ。彼は、鉄製の小手を装着しているので、刀を掴んでも切れる心配がない。

男爵が、そのまま力任せに引つ張る。

すると、タツクス、コーディー、カイル、の順で、異空間から現空間へ、芋づる式に出てきた。

そこへ、間髪入れずに紅蓮の竜が襲い掛かる。

「逃げるぞ！」

コーディーが大声で叫ぶ！

彼らは、階段に飛びつくと、一気に駆け下りた。

敵の追撃が来ると思ったのに、なぜか、紅蓮の竜は追って来なかった。三人は、階上を見上げながら一息ついた。

その時、フロントの奥の部屋から、眠い目を擦りながら宿屋の亭主が出てきた。

彼は、不審そうな顔で三人を見ている。『夜逃げでもするつもりなのか？』とでも思っているのだろう。

「この夜中に、何の騒ぎですか？」

コーディーは、亭主の質問を無視した。

「ここに、どこかの男爵が泊まっているだろう？」

宿の亭主は、根っから人が良いのか？ 自分の質問を後回しにして、コーディーの問いに答えることにした。

「ええ、グロスロー男爵さまで……」

「ふん、そういう名前なのか……」

宿の亭主は、コーディーの顔を窺うかがっている。相手がどういってもりなのか、さっぱりわからない。

「そいつが、二階に火をつけて暴れているんだ！ 俺たちも殺されそうになった」

コーディーの言葉に、亭主は肝を潰した。

「え！ じゃあ、確かめて来ます！」

亭主が二階に上がるうとするのを、カイルが止めた。

「お止めなさいご亭主！ 殺されますよ！」

「でも、二階にはまだお客様もごいますし、火を消しませんと…」

カイルは、二階に向かって叫んだ。

「これから上に行くのは宿屋の亭主です！ あなたも騎士なら、無関係な方には危害を加えないように！」

亭主は、恐る恐る階段を上がって行った。

「くそ！ 余計なことを！ せつかくあいつで二階のようすを探ろうとしてたのに！」

コーディーが舌打ちする。それを聞いたカイルは、黙っていられない。

「あなたは、人を平気で犠牲にするような方だったのですか？ それなら、協力はできません」

たとえ相手が依頼主だとしても、言われて黙っていられるほどの寛大さをコーディーは持ち合わせていない。

「俺はあんたに協力してるんじゃないやなくて、守ってやってるんだぜ！」

ふたりは、胸ぐらを掴みかねないような勢いで睨み合った。険悪になりつつある二人の間に、タックスが割って入る。

「とにかく、ここを出よう！」

三人は、フロントに宿賃を置くと、急いで外へ飛び出した。幸い、カイルの馬は厩しゅまではなく、宿屋の前に繋いである。

「だいぶ慌てているらしいけど、どうかしたの？」

宿屋から飛び出した彼らに、声を掛ける者がいた。

コーディーとタックスは、その声に聞き覚えがある。そちらへ振

り向くと、思った通りの人物が立っていた。

「何だ！お前達か…」

それは、リサリタとクリスだった。闇に溶け込む衣装に白い肌は、いつ見ても印象的だった。

「『何だ！』とはご挨拶ね。あたしたちを置いて出発するつもり？」

リサリタの目は、明らかにコーディーを責めていた。依頼人の前で仲間割れするのはまずいとわかっていたが、はっきりさせるところはさせておかないと、後で困る。

「どういふことが説明してよ！」

リサリタは、コーディーに詰め寄った。彼女は、怒っている時ほど感情が表に出ない。一見すると、そのあどけない顔立ちに騙されそうだが、油断すれば酷い目に遭う。

コーディーは、敵に襲われるというハプニングがなくても、リサリタ達を置いて行くつもりだった。そのため、多少の後ろめたさがあった。だから、リサリタに対する返事も声の上擦っていた。

「敵に襲われたから宿を出たんだよ！ これから、「赤い鳩亭」へ迎えに行くとこらだったんだぜ！」

コーディーは、つい言い訳がましいことを言ってしまった。本当は、「うるさい！」の一言で片付けたかった。

『この女、いつか凹ましてやる！』

コーディーは、心の中で誓った。

「ふん…」

リサリタは、疑わしそうな目つきで、コーディーを見ていた。

そんな時、上の方から呼びかける声が聞こえた。

「諸君、仲間割れかね？」

声の主は、屋根の上に仁王立ちしていた。

満月を背にしたシルエット。彼は、グロスロー男爵だった。その

傍らには、燃え盛る紅蓮の竜が控えている。

「ずいぶんと派手に攻撃してくれたじゃねえか！ グロスローさんよ！」

コーデイーの問いかけに、グロスロー男爵は答えた。

「おや？ 私の名前を知っているのか？」

「ああ、とつくの昔に知ってたぜ！」

コーデイーは、ついさつき宿屋の亭主から聞いたにもかかわらず、こんなことを言っている。

「それでは、君の本名も聞かせてもらおうか？ そうでなくては、不公平だ」

グロスローからこの提案を聞いて、コーデイーはにっこり笑った。「あんたには、晩飯の時に教えたたる！ 頭が悪いな！ 俺の名前はハルロイだよ！」

グロスローの目が細くなる。口ひげがピンと立った。

いよいよ、紅蓮の竜を始動させるつもりだ。しかし、それより先に仕掛けて来た者がいた。

「恋人たち（ラバーズ）！」

クリスが、宿屋の壁を拳で殴った。すると、殴った部分の壁が丸く光る。

クリスの拳から発した丸い光は、壁を駆け上がり、屋根に到達し、グロスローと紅蓮の竜の所で止まった。

「何だと！」

こう叫んだのは、グロスローだった。紅蓮の竜も、彼自身も、その場から動けなくなっている。屋根に敷いてあるスレートの板に、ブーツの底がぴったりと着いていた。その上、足もブーツから抜くことが出来ない。どうやら、屋根に接着されてしまったようだ。

「くつついて離れない。つまり、恋人たちが……」

グロスローは、人事のように呟く。

「安心しろ！ しばらくすれば、動けるようになるらしいぞ！」

コーディーが、軽く手を振る。彼らは、グロスローをそのままに
して出発した。もつとも、待つてあげなきゃならない義理はない。
しかし、グロスローは、たいして悔しそうな顔も見せずに行方を
見送った。

「ふん、すぐに追いついてみせるさ！」

彼は、ペンを取り出すと、紙切れに何事かをしたためた。足は動
かせないが、手は自由に動く。そして、懐から鳩を出すと、紙切れ
をその足に結び付けた。

鳩を放す。鳩は、コーディー達が向かった方角へ飛んで行った。

「奴等をガイアール城には入れん！」

グロスローは、鳩の行方を目で追っていた。

コンケスの町を後にしたカイル達五人は、夜通し歩いた。クリス
の魔法力「恋人達」の魔力により接着している時間は、約二時間。
この間になるべく差を広げておくつもりだった。

「どうしてタックスだけ楽しってるの？」

クリスが、コーディーの顔を覗き込んで聞く。五人の中でタック
ス一人だけが、馬に乗っていた。例によって眠っているため、うつ
ぶせのまま乗せられ、落ちないように縄で縛ってある。

「疲れてんだろ！」

コーディーは、誰に聞かれてもこの答えで通すことにしていた。

「でも、馬は依頼人の持ち物なんだから、それを独占しているのは
どうかと思うけど？」

クリスだけではなく、リサリタまで会話に入ってきた。コーディ
ーは、癩癩を起こす寸前だった。

「人それぞれに体の事情があります。タックスさんに馬が必要なら、
私は歩きで構わないですよ」

優しい感じを受ける上品な話し方をしてきたのは、カイルだった。
彼の肩に止まっているエルシークも、それに同意するかのように一

声あげた。

「ほらみる！ 高貴な方の言われることは一味違っぜ！ あくあ、心にゆとりが持てない卑屈な連中と付き合うのは、嫌だ嫌だ！」

コーディーは、これ見よがしに大声で言う。まるで子供みただい。リサリタとクリスは、互いに顔を見合わせる。この二人とコーディー、どっちが年上なんだかわからない。外見上は、コーディーの方が明らかに年上だ。しかし、精神面では、クリスとコーディーが同レベル。リサリタがそれよりもずっと大人、といった図になる。

とにかく、『こいつには、何を言っても駄目だ！』

二人はこう認識したので、それ以上コーディーを追及することはなかった。

「だいぶ森の中に入って来たね」

クリスが、話題を変えるかのように呟く。

確かに、満月に照らされていた街道も、木々によって遮られ始めていた。

「はい、カンテラ」

クリスは、背負っていたバッグを、リサリタの方へ向けた。彼女は、バッグの中からカンテラを取り出し、芯に火を灯す。

「おい、一つしかないのかよ！」

コーディーが、いきなり身勝手なことを言い出した。

「俺のは『王冠亭』に忘れて来たんだ！ なんせ、ひどく慌てていたからな！」

リサリタは、コーディーの喉を掻き切ってやりたい衝動に捕らわれていた。

「それはあなたの事情でしょ！ あたしとクリスで一つしか持っていないの！」

リサリタは、きっぱりと言った。カンテラの明かりは弱いので、三人分を照らせるほどではない。

「ずいぶんと冷たい女だな！ ギルドの暗殺部門担当だけはある」

コーディーの言葉は、リサリタの心を直撃した。なぜか彼女は、ちよつと涙目になっていた。何だかんだ言っても、彼女も傷つきやすい十代の女の子だ。たとえそれが本当のことだとしても、面と向かつて言われれば、胸の奥から込み上げて来るものがある。

「失礼な！ ちゃんと護衛とかもしてます！」

リサリタの頬に、涙の粒が光っていた。それを見て、コーディーは大笑いする。

「お前、泣いてんのか？ どうせ一時の感傷だろうけどな！」

コーディーの指摘は、的を得ていた。殺人を犯した時のショックが、「暗殺」というキーワードで一時的に蘇ったに過ぎない。人が人を殺すのは、まともな神経ではできない。結局、幾つものトラウマを抱えることになる。

何だか収拾がつかなくなってきた二人を見て、カイルが仲裁に入った。

「いい争いは止めてください！」

ももとの原因は、コーディーがカンテラを持っていないことに始まっている。カイルは、そこを解決しようとした。

「コーディーさんに私のカンテラを貸しますから、馬の轡くわを引いてください。私は、その馬の尻尾に捕まって行きますから」

カイルの提案に、コーディーは大喜びした。

「さすがは神に仕える寺院騎士団のメンバーだ！ どこかの冷血女とは天と地ほどの差がある」

リサリタは、コーディーに言い返した。冷血女と言われては、黙っていられない。

「ちよつと待って！ コーディーの方が馬の尻尾に捕まって行きなさいよ！ あんた何様のつもり！」

「何で俺が馬の尻を嗅ぎ回らなきゃならないんだよ！」

コーディーという男は、えらいわがままだった。

カイルは、リサリタにそつと近づいた。

「貴方の心遣いは嬉しいのですが、先を急がねばなりません。追っ手云々（うんぬん）ではなく、早く目的地に着かなければならないのです。ここは、コーディーさんに譲りましょう」

カンテラの仄ほのかな明かりに、二人の顔が照らされた。カイルの誠実そうな目と、凜々しい顔立ちが、リサリタの間近にあった。彼女は、瞬きさえも忘れて、それに見入っていた。

リサリタの肌が、ほんのり赤くなる。その原因は、カンテラから出る熱だけではなさそうだ。

「貴方の決めた通りでいいです」

彼女は、カイルを見上げていた。その瞳が、妙に艶っぽい。少女の瑞々しさと、大人の女の色っぽさを混ぜ合わせたような、そんな強力なフェロモンを、リサリタは出していた。

「わかってくれて、ありがとう」

しかし、カイルの返事は素っ気なかった。彼は、その事に関して鈍感なので、目の前の少女が自分に対して只の好意以上の思いを持ち始めていることに気づいていない。代わりに、彼の肩の上にいるエルシークのほうが、そのことに気づいていた。何故なら、しばらく前から寂しそうな視線を、カイルとリサリタの両方に送っていたからだ。

さて、一行は、どんどん森の中へ入って行った。月明かりも通さぬ闇の中で、二つのカンテラだけが揺れていた。その内の一つは、コーディーだ。彼は、右手にカンテラを持ち、左手は馬の轡くわを取った状態で、森の中を進む。馬の背には、相変わらず熟睡中のタックス。あとから続くカイルは、馬の尻尾を掴んでいた。彼は、暗闇の中で転ばぬように気をつけながら歩いている。そして、リサリタとクリスは、後ろを警戒しながら最後尾について行く。残りの一つのカンテラは、この二人が共同で使っていた。

マイアール皇国記 魔人復活編（二章のみ）

くじ

黒魔術会VSギルド（前書き）

グロスロー男爵の攻撃から逃れ、森に逃げ込んだカイル達に、新たな刺客の魔の手が迫る！

黒魔術会VSギルド

真上に見える星空。それだけが、一行の道しるべだった。どこかで、狼が吠えている。仲間に獲物が来たかと合図しているのか？しかし、獲物のほうは、狼ごときじゃ怖がらない連中ばかりだ。

「おい、こちら辺りで一泊しようぜ！」

コーディーが、後ろに呼びかける。

「何？ 狼が怖いのか？」

リサリタが、大声でからかった。

仲良く並んだ発光体が、森の木々を縫って駆け抜ける。それは、夜行性の獣の目だった。その数、ざっと二十から三十。

「バカ！ 馬が怯えて歩かないんだよ！ それに、もう眠いや！」

一行が休息したのは、少し開けた場所だった。見下ろす形で、大きな木が生えている。獣避けに焚き火を炊くと、彼らはぐっすり眠った。ただ一人、見張り役を買って出たのは、いきなり目を覚ましたタックスだった。

<この時のために今まで寝ていたのか>

と、コーディー以外の全員が思った。しかし、実際は、偶然いいタイミングで目を覚ましただけだ。

あちらこちらで狼の遠吠えが聞こえたが、カイル達の眠りを妨げることはない。時間は、午前五時を回っていた。

次の日の朝、一番最初に目を覚ましたのは、カイルだった。彼は、朝の清々しい空気で肺の中を満たした。

「うーん、気持ちのいい朝だ！」

冷気が、カイルの心身を引き締める。彼は、素振りを千回ほどし

たい気分だった。実際、剣を手に取りとうとしたが、その上にはエメラルド色のミンクが寝ている。起こしてはかわいそうだと思い、朝の素振りを諦めた。

「おはよう、カイルさん」

いきなり声を掛けられたカイルは、そちらのほうへ向く。そこには、リサリタがいた。

「何だか、恋人同士みたいね…」

リサリタは、先ほどのカイルの行動を見ていたのだろう。妙に意味あり気に問いかける。エルシークが乗っていて剣が取れなかったことは、誰が見てもわかる。

「いや、別にそういうわけじゃ…」

「じゃ、どういうわけなのかな？」

リサリタが、カイルの顔を見上げる。目は笑っているので、本気で問い詰めるつもりはない。しかし、カイルは顔を真っ赤にしていた。

「まっ、ミンクにやきもち焼いたって、仕方ないものね！」

カイルは、リサリタの言葉の意味を理解していない。ただ、わけもなく頷いていた。

リサリタは、体が大きくて、顔立ちも精悍な若い騎士が、本気で困っているのを見て、おかしい気分になった。思わず吹き出す。

「ごめんなさい、でも、あなた、ちょっと変だわ」

リサリタに、面と向かってこう言われても、カイルは気に留める様子もない。

「ちょっとだけですか、よかったです」

カイルのこの返事に、リサリタは再び吹き出す。笑いの対象となつている本人は、それを見て首を傾げるばかりだ。

「朝っぱらから楽しそうじゃないか！」

二人の間に緊張が走る。この声は、仲間のものではない。声の方を向くと、見知らぬ男が立っていた。

そいつは、二人から十歩ほど離れた場所に立っていた。小柄で、頭

の形が三角形だ。その三角形のてっぺんには毛がなく、代わりに縫い後が一本入っている。目は細く、鼻は小さい。口は裂けてるかのよう大きく、牙でも生えてそう。シラミでもいそうなボロ布を身に纏い、こちらをじいっと睨んでいた。

「なんか、危なそう…」

リサリタが、目の合図でカイルに警戒を促した。そして、寝ている仲間を起こすため、コーディー達がいる方を見た。

「！」

リサリタは、余りのことに声もでなかった。仲間たちが寝ている所には、石の像が、並べてあった。しかも、本人そっくりな…。

コーディー、タックス、クリス、そして、エルシークや馬まで、石に変えられていた。

「我が名はボルシチ、黒魔術会からの刺客よ…」

三角頭が不敵に笑う。

「ギルドの連中も大したことはない。やはり、我が組織の前では赤子同然だ！」

ボルシチは、得意げに話す。

彼の所属する黒魔術会は、ある邪教団体の一組織だ。汚い仕事を請け負っても、その報酬を献金すれば、全て邪神に許されるということんでもない考えかたをしている。そのため、神の名の下に、暗殺、阿片の売買、売春の斡旋あっせんなどを行う生臭い宗教組織だ。

「へえ、あなた、あんなおかしな集団に入ってるの？」

リサリタが、相手をバカにしたような態度で話しかけた。

「何を無礼な！ 我が行いは救いの道だ！」

リサリタは、それを聞いて思わず笑ってしまう。

「金のために人を殺して、誰を救うの？」

こう聞かれたボルシチは、救いようがないほど真剣な表情で、それに答えた。

「教えてやるからよく聞け！ お前を殺して報酬を得たとする。そ

の報酬を我が教団の救済救世活動に使うなら、お前の魂は救われて我が楽園に行けるし、殺しを頼んだ依頼人も、魂の救いが得られる。つまり、教団のために尽くすことこそが、この世を救うことだ。ギルドと違って、私利私欲の団体ではない！」

こんな勝手なことを言われたら、怒りを通り越して呆れてしまう。

「コーディー以上に自分勝手ね」

リサリタは、最近知り合ったわがままな奴を比較に出した。

「だから、おとなしく救われる！」

ボルシチは、両手を前に突き出した。

その時、カイルがリサリタを押しつける。そして、地面に落ちていた杖を、両手で一本づつ持った。

<ヒュン、ヒュン、ヒュン>

両手の杖を、物凄い速さで打ち振るう。

すると、カイルの足元に、幾つかのドングリが転がった。

「やっぱリドングリか……」

カイルが、独り言のように呟く。

「みんなの体の上にドングリが乗っていたから、たぶんそれが原因じゃないかと思っていたんだ」

冷静な判断をしたカイル。しかし、彼の両手は石と化していた。

「よくぞ見破った。我が術は、石化の魔法力。その力を、ドングリに封じ込めている。それを、指先にて弾き出す。すると、ドングリに当たった生き物は、たちまち石の塊へと姿を変える。しかも、直接当たらなくても、物を伝わってその生き物を石化する事ができる」得意げに語るボルシチに、リサリタは冷たい言葉を浴びせた。

「さっさと勝負しな！ あんたの寿命は、これから五つ数える間だよ！」

仲間を攻撃されたことで頭に來たらしい。リサリタは、えらく荒っぽい言葉遣いをしていた。

彼女は、ゆっくりとボルシチとの間合いを詰めた。

ボルシチが、両手を前に突き出す。

リサリタは、前方に駆け出した。

ボルシチの指先から、六発のドングリが弾き出された。

リサリタは、自分が着ている衣をスルリと脱いだ。そして、それを前方へ投げ出した。前方で広がった衣は、ボルシチが撃ち出したドングリをからめ捕り、地面へ落ちる。間合いは、五歩に縮まっていた。

こうなると、ボルシチも焦ってくる。彼は、今度は右手だけ突き出すと、再び三発のドングリを発射した。

「ち！」

五歩の間合いなら、たとえ慌てていたとしても、外すわけがない。しかし、実際には、リサリタにドングリは当たらなかった。彼女は、突然消えたのだ。そして、二、三步ほどサイドステップした場所へ、いきなり現れた。

目標を失った三発のドングリが、虚しく飛んで行く。

間合いは、三步に縮まっていた。

「瞬間移動が、お前の十八番か！」

ボルシチが叫ぶ！

リサリタが、再び消えた。

ボルシチは、地面を転がり、その場から移動した。

「あの女が次に移動してくるのは、俺が元いた場所に違いない……」

こう考えたボルシチは、いつでもドングリを撃ち出せるように身構えた。

<ドス！>

鈍い音が、彼の頭のとっぺんで起こった。その部分が、異常に熱い。

何かが、額を伝う。それは、眉を乗り越え、目を覆い、口許まで伝う。その正体は、血だった。

「そんな！」

ボルシチは、心の中で叫んでいた。

リサリタは、彼の背後に立ち、その三角頭のとっぺんにナイフを突き立てていた。深々と刺さったナイフは、刀身が見えなくなっている。

「三步の間合いの中なら、確実に仕留める。それが私の強み！ 四、五、ボルシチ、ちょうど時間だよ！」

リサリタは、手首を捻った。彼女のナイフは、ボルシチの脳を破壊した。

リサリタがナイフを引き抜くと、ボルシチは草むらの中に倒れた。彼女は、無表情のまま、死者の着物で刀身を拭う。

幼い顔立ちに守ってやりたいような小さい体。染み一つない白い肌は、清らかな乙女を思わせる。そんな彼女の外見に騙されてはいけない。彼女は、ギルドの中でもトップクラスの暗殺者だ。

さて、リサリタがカイルのほうを向くと、石化していた彼の両手は、元に戻っていた。どうやら、本体が死んだために、その魔法力も失われたらしい。

「あゝあ、よく寝た」

大声とともに、コーディーが起きて来た。今まで自分が石の像に変えられていたことに気づいていないようだ。

カイルとリサリタは、互いに顔を見合わせた。

「何だよ！ 何か可笑しいか？」

「べつに、ただ、石みたいに寝てたから……」

「バカ！ それを言うなら、泥のようにだろ！」

リサリタは、可笑しくてたまらないようだ。

「いいのよ、石で！」

そんな時、タックスとクリスも目を覚ました。

「何、もう朝なの？」

クリスは、寝ぼけ眼だ。まなこ

全員が目覚めると、携帯用の保存食で朝食を始めた。リサリタに秒殺されたボルシチが目に入ったが、カイルとエルシーク以外は食欲旺盛だ。

「あいつ、どうしたんだ？」

コーディーが、リサリタに聞く。

「あたしが殺したの。黒魔術会の人だって」

リサリタの返事は素っ気無い。

「そう」

コーディーの反応も、あっさりしていた。驚くほど関心を示さない。

そんな彼らを見て、カイルは目を丸くしていた。それに、リサリタがボルシチにナイフを突き立てた時の顔を、ふと思いついていた。それは、立派な仕事をやり終えた後の職人のような、充実している顔だった。年端もいかぬ女の子が、殺しを仕事と考えているかと思うと、何だか恐ろしい。

朝食を済ませた彼らは、森を抜けるべく出発した。このまま南に進路をとれば、ルーアンという宿場町に出る。そこも、コンケスと同じように、街道沿いの町だ。

北の強国アッシュから、このマイアール皇国を縦断して、南のマジン国へと抜ける。この街道沿いには、首都を含めた大きな町が五十くらいある。ここでは、交易が盛んに行われ、物品の供給が豊かだった。首都を中心に北へ延びる道をアッシュ街道と呼び、それより南に延びる道をマジン街道といった。カイル達は、マジン街道と平行して走っている、森の中の間道を急いでいた。彼らの目的地であるクロテニアは、マジン国の国境線に近い。

「せっかく森の中を行っただけなのに、何で刺客が襲って来たんだ？」
コーディーは、タックスに話しかけた。タックスは、ちゃんと起

きて歩いている。従って、馬は持ち主であるカイルが乗っていた。
「たまたま勘が当たったのか？ それとも街道と間道の両方で待ち伏せしてたのか？ どっちかだね」

「お前はどっちだと思う？」

タックスは、愛嬌のある丸顔を顰めて考え込んだ。

「さあ、連中がどのくらいの人数を繰り出しているのかわからないし……」

「でも、一人で襲って来たってことは、いろいろな所で待ち伏せしてるんじゃないかね？」

「いいえ、そうとも限らないわよ。黒魔術会の連中は自信過剰だから、一人でも充分だと思ってるのかも？」

二人の会話に口を挟んで来たのは、リサリタだった。

「何だよ、俺達ギルドも舐められたもんだな！」

コーデーの表情が、不機嫌になつて来た。彼は、感情の起伏が激しい上に、すぐに顔に出るので、すぐわかりやすい。とても氷を使う魔法使いとは思えないほど、熱しやすかった。もっとも、冷めやすいという点もある。

一方、リサリタは、そのアクアブルーに輝く瞳を動揺させることがなかった。大きな目と、歯並びがいい白い歯は、絶えず穏やかさを湛えていた。しかし、そのために、何を考えているのかわからない面がある。顔立ちは初々しい少女なのだが、態度と表情はまるつきり大人だ。そのアンバランスさが、彼女の魅力となっている。

ついでにタックスだが、一見すると、彼は無害な男に見える。小太りで二重顎、ボーツとしていることが多い。しかし、物事を冷静に判断できることや、周りを見る観察眼はなかなかのものだ。人は見かけによらない。今も、一つ発見した。

「あの鳩、こつちをじつと見てるね」

タックスが言う鳩は、道の右側にある高い木の枝の上に止まっていた。

喉を鳴らし、首を小刻みに動かしてはいるが、こつちを見てるこ

とは確かだ。

リサリタは、スローイング投擲用ナイフを取り出した。彼女の腕なら、一発で仕留められる距離に鳩はいた。

「何だよ！ そんなに腹が減ってるのか？」

コーディーがからかう。

リサリタは、そんな言葉を無視して振りかぶった。

その手を、後ろから誰かが掴む。

「無益な殺生は止めましょう」

その力強い声の主は、カイルだった。

「えっ、だって…」

リサリタが弁解しようとして振り返った時、鳥の羽ばたく音が聞こえた。

「バサ、バサ、バサー」

鳩は、逃げ去ってしまった。

「あゝあつ」

声を上げたのはリサリタとタックスのみ。あとの皆は、鳩が逃げられたのを喜んでいるらしい。

リサリタとタックスは、顔を見合わせた。この二人だけは、鳩が黒魔術会の手先ではないかと疑っていた。

「結局、あたし一人が悪者ね…」

タックスは、落ち込んでいる彼女の肩を軽く叩いた。

「次の町で一杯おごるよ」

それを聞いたリサリタは、顔を綻はらばせた。

「じゃあ、あなたの気が変わらないうちに急がなきゃ！」

彼女は、いくぶん元気を取り戻したようだ。

カイル達は、その後、休まずに歩き続けた。間道から街道に戻った彼らは、日暮れ頃には、次の宿場町であるルーアンへ着くことができた。

ルーアンでは、「仔鹿亭」という名の宿屋に泊まった。繁華街が

ら離れた小さな宿屋だ。もし、敵の襲撃があつた場合、無関係の人に被害が少ないように考えて、そこに決めた。

小さな宿屋である「仔鹿亭」では、食事がいっさい出ない。泊り客は、食事を外であるか、持ち込むしかない。カイル達は、宿の前に建つチーズとワインの店で夕食を済ませることにした。そこは、居酒屋を兼ねた食堂だった。

食事を終えた彼らは、宿に戻つてぐつぐつと眠った。

部屋は、二階の三号室。コンケスの町での「王冠亭」と一緒なのが、ちよつと気になる。それでも、その夜は何事も起きなかつた。ただ、夜だというのに外で鳩が鳴いていた。旅の疲れからか、誰もそのことに気がつかない。

この国は、十二の動物で表す月と、七つの色で表す日がある。日を表す色は、動物と組み合わせることで、一月分の二十八日を表していた。

カイル達は、狼の月の赤狼の日の朝を迎えていた。

その日の朝、最初に目を覚ましたのは、リサリタだった。窓側で寝ていた彼女は、雨戸から漏れる日の光に直撃された。

リサリタは、まるでバネ仕掛けで動いたかのように上半身を起こした。その後、寝ぼけ眼を擦り始める。その仕草は、まるつきり子供みたいだ。

「もう、眩しいんだから！」

彼女は、大きく伸びをした。着けているのは下着だけなので、体の線がくつきり見えていた。透き通るような白い肌には贅肉がなく、俊敏な動きをする軽業師のようだ。胸は大きいほうではないが、ちゃんと膨らんでいる。

ズボンを穿いたりサリタは、雨戸と窓を開け放つ。部屋の中の淀んだ空気と、外の新鮮な空気が入れ替わるのが、はっきり感じられた。

ほかの四人は、それでも目覚めない。

リサリタは、歩き疲れている仲間達を起こす気にもなれず、一人ぼっちの気分をしばらく味わっていた。

彼女は、クリスがいつも背負っているバッグを探った。中からは小さめの豎琴が出てきた。どうやら、クリスはリサリタの荷物持ちらしい。

豎琴を手に、窓辺に腰掛けた。窓枠を背もたれにすると、豎琴の弦に触れる。

細くて白い指先からは、柔らかくて綺麗な音色が響いた。

「綺麗な音楽で気持ちいい目覚め。これしかないでしょ」

リサリタが、独り言を言う。肩まで伸びる金色の髪が、風に揺れた。彼女は、ちょっと男の子みたいなかすれた声で、フランクな唄を歌い始めた。それは、豎琴の上品な音色には合わないような声に思えたが、実際に聞いてみると、妙に調和していた。

―二人の冒険者が旅に出た―

―虹の終わりを見に行く旅だ―

―湖を見つけては喉を潤し―

―山があればひたすら登る―

―夜になったら野宿をし―

―二人で体を温め合う―

―この世で最高の仲間―

―あなたとわたしは―

歌い終わった彼女は、ふと、誰かの視線を感じた。それは、部屋の中からではない。

「けっこう唄がうまいんだな！」

コーディーが、珍しく彼女を褒める。唄を褒めているわりには、視線は別の所に向いていた。下着の胸元と、ズボンの中で見え隠れしている真っ白なお腹と可愛いおへそだ。

目を覚ましたのは彼だけでなく、タツクス以外の全員だった。

リサリタは、唄の余韻に浸っているのか？ 何やら考え事をしていた。

「何だよ！ 人がせつかく褒めてやってるのに！」

コーディーが、不機嫌そうに怒鳴った。

リサリタは、初めてその存在に気づいたような顔をした。

コーディーに対して、少し微笑む。コーディーは、リサリタの意図がわからずに、戸惑っていた。

「ねえ、キスして」

コーディーは、自分の耳を疑った。それは、彼だけでなく、カイルも同じ気持ちだった。ただ、クリスだけは、なぜか急に身支度を始めた。

「聞こえなかったの？ あなたに言ったのよ」

リサリタは、甘ったるい声を出した。

コーディーも、それほど初心^{うぶ}じゃないので、苦笑いしながら近づく。

「何だよ、朝っぱらから！」

コーディーが、長い髪を掻き上げる。彼は考えていた。舌を入れてもいいかどうか？

「お前、胸はちょっと小さいけど、美人だぜ！」

性格と同じように顔立ちもハッキリしているコーディーは、なかなかの男前だ。ちょっと遊んでそうなところがあるのが、欠点といえば欠点か？ 彼の茶色の瞳が、リサリタの顔に注がれた。

リサリタの、紅を差してないピンク色の唇は、瑞々しい果実を思わせた。コーディーが、その果実を食べに行く。

「向かいの建物に目だけ向けて……」

リサリタは、触れ合う寸前で囁いた。そのため、実際には触れていないのだが、キスをしているように見えている。

コーデューは、視線だけを外に向けた。

向かい側の建物は、夕べ食事をとった場所だ。その前に、誰かが立っていた。

その人物は、青いマントに身を包んでいて、すごく目立っていた。目深に下ろしたフードの奥は真っ暗で、顔がわからない。

「何だ、あいつは？」

コーデューも、小さな声で喋る。

「黒魔術会だと思う」

「で、どうする？」

リサリタは、少し考えてから指示を出した。

「あなたは宿の裏口から出て、気づかれないように奴を見張ってよ。あいつが宿に入って来たら、後ろからついて行って」

「お前は何をするんだよ！」

コーデューは、ちよつと不機嫌だ。リサリタに命令されるのが気に入らないらしい。

「あたしは、奴が入って来たら、こつちから降りて行くわ。これで、あいつを階段の所で挟み討ちにできる」

コーデューは、作戦を了解すると、リサリタから離れた。彼は、服を着たまま寝ていたので、そのまま外に出られる。

「クリス！ コーデューについて行って」

クリスは、渋々頷いた。それを見たコーデューは、気分が悪い。

「こんなガキ、いらねえよ！」

コーデューの言い分を、リサリタは却下した。

「駄目、タックスが戦力外なんだから！」

タックスは、ただいま睡眠中。それに、今の彼は、グロスロー男爵に刀を取られてしまっているの、丸腰だった。

「ふん、勝手にしろ！」

コーディーは、怒って部屋を出て行った。
その後を、クリスがひよこひよこ付いて行く。

（五人もいる所へ一人で来るような奴だ。全員で一気に片付けるに限る）リサリタは、こう考えていた。

「ちよつとお話があります」

リサリタに声を掛けて来たのは、カイルだった。彼の顔は、えらく真剣だった。

「あつ、はい、どうぞ」

相手に威圧され、リサリタの返事はしどろもどろだ。

「男性に口づけを求めるのは、そうしたいのだから仕方ないとしても、あなたのはあまりにも露骨すぎます！」

「だって、すぐにキスしたいんだもん」

リサリタは、こんなことを言つて、カイルをからかつてやるうかと思つた。しかし、何だか冗談が通じない雰囲気なので、止めた。

「外に敵がいるのを知らせようとしたんです」

それを聞いたカイルは、窓から身を乗り出した。

「ああ！ 相手に気づかれちゃう！」

リサリタが叫ぶ。彼女は、こうなることを恐れていた。だから、わざわざキスの真似事までしてカモフラージュしたのに、全てが無駄になつてしまった。

「誰もいませんよ？」

カイルの意外な返事。確かに、青いマントの人物は、その場に存在しなかった。

（宿の中に入って来たのか？）

そう考えた彼女は、部屋を飛び出し、階段を駆け下りる。宿の外まで出て行ったが、青いマントの人物はもちろん、コーディーとクリスまで姿が見えなかった。

「どこへ行ったのかしら？」

ズボンこそ穿いているが、白い下着に素足という格好で、リサリ

夕は立ち尽くしていた。

水使いのアージャン

「仔鹿亭」の裏口から抜け出たコーデイーは、建物の角を回って正面に出て来た。そして物陰から、こつそりと青マントを観察する。その後ろには、クリスもついて来ていた。

「何者なんだろ？ 顔を隠しているから、恥ずかしがりやなのかな？」

クリスの疑問に、コーデイーは面倒くさそうに答えた。

「バカ！ 魔法使いに恥ずかしがりやも何もないだろ！」

「だって、僕は恥ずかしがりだもん」

クリスは、拗ねたような表情を見せた。

「もう、お前は喋るな！」

コーデイーは、クリスを睨みつける。

クリスは、この世の不幸を一身に背負っているような顔をした。

そんな時、青マントが、店の前から路地へ移動した。流れるような動きで進む青マントは、どんどん遠ざかって行く。

「おい、クリス、奴を追うぞ！」

リサリタとは、宿に入ってきた場合の対処法しか話し合っただけだった。しかし、奴は宿に入ってきて来ない。仕方なく、コーデイーの独断で、青マントの追跡を開始した。

店の裏手は、小高い丘になっていた。放牧された牛が、のんびりと草を食^はんでいる。

青いマントの人物は、足早に進んで行く。彼は、一度も後ろを振り返らない。

「あいつ、恐らくただ者じゃないぞ！」

コーデイーの言う通り、青マントは普通じゃなかった。彼は、平坦な石畳でも、上り坂になった草原でも、まったく同じように進ん

でいる。丘を登っているのに、上半身の揺れがまるでない。

「あの歩き方が、奴の魔法力なのかな？」

コーデューは、クリスに意見を求める。しかし、彼は何も返事をしてくれない。

「何だよ！ 俺が喋るなって言ったからか？」

コーデューの質問に対して、クリスは頷いた。

「わかった！ ずっとそうしとけ！」

コーデューは、どうでもいい気持ちになっていた。

一方、青マントは、追跡者のそんな会話も気にすることなく、それから十五分あまり歩いた。そして、丘の上にある一軒の小屋に辿り着く。辺りを警戒もせず、奴は小屋の中に入った。

「さて、どうするかな？」

コーデューは、ここが思案のしどころだった。このまま小屋の中に踏み込むべきか？ それともしばらく見張っているべきか？

「とりあえず、近づいてみるか……」

彼は、小屋の周りを調べてみた。

入り口は一つだけ、後は窓もない。丸太で組んであるため、凄く頑丈そうだ。小屋から少し離れた所では、グレーの袖なしを着た羊飼いが、のんびりと羊を追っている。それ以外は、小屋の周りに人はいない。

「あいつが魔法使いだって証拠はないんだぜ！ こんな所で日向ぼっこしてる場合じゃないだろ！ よし、踏み込んで確かめるんだ！」

コーデュー君

クリスが相談相手になってくれないために、自然と独り言が多くなる。コーデューは、自分に自分で話しかけて、小屋に入る決断を下した。

ーギイギイギイギイ

軋んだ音を響かせ、入り口の戸は簡単に開いた。小さな部屋には、

家具が一つもない。椅子やテーブルさえも無いのだ。

コーディーとクリスの正面には、青いマントの人物が、背を向ける形で立っていた。そのまま、微動だにしない。

コーディーは、クリスに手で合図を送る。クリスは右、コーディーは左から、青マントに近づいた。コーディーが、右手に氷の斧を発生させる。

「お前、何者だ？」

コーディーは、青いマントの人物に話しかけた。

「グシャー」

この音とともに、青いマントが崩れ落ちる。マントの中身が消えてしまったのだ。

びっくりしたのは、コーディーとクリスだ。突然、目の前で人が消えたのだから。

しかも、着ている物を残して…。

コーディーが、床に落ちているマントを恐る恐る触る。青いマントは、ぐっしょりと濡れていた。その上、床にも水が零こぼれている。

「どうなってやがんだ！」

「ボタン」

後ろで、扉が閉まった。

「野郎！ 罨こぼか！」

クリスとコーディーは、急いで出入り口の扉に向かった。二人で扉に体当たりをするが、ビクともしない。

扉の外からは、耳障りな笑い声が聞こえて来た。

「君たちもバカだね。この水使いのアージャンの罨こぼに掛かるなんて！」

外から聞こえる声は、小屋の中に響き渡った。

「水を人の姿の塊にして、マントを着せて立たせておいたんだよ！ 君達みたいなバカが、不審に思って尾行するようにね！ まったく、あんな見え見えの餌に掛かるなんて、君たちは恥ずかしくない

の？」

コーデイーは、そんな話しを聞いてはいない。ひたすら、扉に斧を叩き込む。扉には、十センチほど切り込んだ。この丸太組の小屋から脱出するには、ずいぶんと時間が掛かりそうだ。その間にも、水使いのアージャンは喋り続けた。

「尾行してきた連中は、この特別製の小屋にご案内する。どうしてだと思おう？」

コーデイーは、斧を扉にガンガン叩き込む。氷の斧は、刃こぼれしてもすぐに再生するので、切れ味は変わらない。

「こっちはそれどころじゃねえーんだよ！」

コーデイーは、扉の外に向かって言い返した。

「小屋の位置は、地形にも関係するんだよ」

アージャンは、きわめてマイペースで話しかける。

「てめえーとなぞなぞ遊びをしてるわけには行かないんだ。ここから脱出したら、絶対にお前を殺す」

コーデイーは、アージャンの余裕を持った話し方に対して、完全に頭に来ていた。しかし、扉の外の声は調子を変えない。

「ヒント一、小屋には、窓が一つもついていない。その上、完全防水。ヒント二、小屋の下には地下水が流れている。ヒント三、ぼくは、水を自由に操れる」

コーデイーは、そんなクイズよりも、脱出するほうが先とばかりに斧を動かす。切り込みは、二十センチに達していた。

「ふざけんな、バカ！ 俺がここから出るまでおとなしく待ってるよ！」

コーデイーが叫ぶ。

それを聞いて、アージャンはつまらなそうに呟いた。

「ブウ！ 答えは、『君たちは死ぬ』です」

その言葉と同時に、小屋の中では異変が起こった。床から、水が噴き上げたのだ。大量の水は、たちまちコーデイーの膝に達し、更

に水かさを増す。

「おい、服が濡れるだろ！」

コーディーは、今まで以上の速さで扉に斧を叩き込んだ。大忙しのコーディー。そんな彼の服を、ちよいちよいつと引っ張る人物がいた。それは、クリスだった。

「何だよ、ガキ！ 何の役にも立たないくせに」

コーディーは、血走った目でクリスを睨みつけた。これでは、いい男も台無しだ。

クリスは、それにもめげずに話し掛ける。

「あんまり魔法力ちからを使わないで…」

クリスの忠告に対して、コーディーは納得できずにいた。

「何だよ！」

「ちよつと耳かして…」

「ちゃんと返せよ、バカ！」

クリスは、コーディーに耳打ちした。

クリスの案を聞いて、コーディーの顔は平静さを取り戻して来た。

「ふうん、お前って、頭がいいんだな…」

バカと言ったり頭がいいと言ったり、コーディーの評価は本当に定まらない。

コーディーは、右手の斧を消した。

そうしてる間にも、水かさはどんどん増し、コーディーの首の辺りまで来ていた。コーディーと二十センチ以上も背が違うクリスは、とつくに足がつかなくなっている。立ち泳ぎで何とか水面に浮いていた。

それを見かねて、コーディーが彼を支える。立ち泳ぎをする必要がなくなったクリスが、きよとんとした顔でコーディーを見ていた。「一つ貸しだな！」

照れたようにコーディーが言う。

「ありがとう…」

クリスは、小さく呟いた。

アージャンは、小屋の外でのんびりと空を眺めていた。空に浮かぶ雲は、想像力をかきたてて、暇つぶしにはもってこいだ。グレーの袖なしを着た彼は、大きく伸びをした。周りには、羊が集まっている。

「ほら、役目は終わったよ、好きな所へお行き」

羊を追い飛ばす。羊は、メーメーと鳴きながら、牧草地帯を走って行く。

「楽勝、楽勝」

彼は、満足げに独り言を言う。

水使いのアージャン。彼は、陰湿で暗い黒魔術会のメンバーとは思えない少年だった。抜け目がなさそうな顔立ちではあるが、どこか憎めない。例えるなら、小ズルイ小猿だ。けっこう持ち物に気を使う奴で、腰の短刀の柄には、紅水晶が付いている。首には、骨を綺麗に加工したネックレスを掛けていた。羊飼いの扮装は、その場かぎりのものだったが、角笛や杖は使い込んだ物を借りて来ていた。そんな所は、非常に用心深い。

「さてと、奴らも溺れた頃だろう」

小屋の中は、すでに天井まで水が達しているはずだ。あと少し待てば、中で二つの水死体ができる。コーディーとクリスは、手も足も出ないはずだった。

そんな時、突然、目の前の小屋が物凄い音を立てた。

<バリバリバリ>

それは、木材が引き裂かれる音だった。

「何事だ！」

アージャンが、目を見張る。彼の目の前で、あの頑丈そのものだった小屋が、見事に砕けていた。今まで小屋のあった場所には、巨大な氷の塊があった。立方体をした氷の塊は、小屋の中の水を凍らせた物だ。その中には、コーディーとクリスが閉じ込められていた。

「何だよ、こんなオブジェはいらないよ！」

アージャンが、呆れた様子で叫んだ。

しかし、氷はそのままでではなかった。あっという間に水へと戻り、辺り一面を水浸しにする。

そんな中で、コーディーがよろよろと立ち上がった。

「お前か！ 俺様を溺れさせようとしたのは！」

コーディーは、アージャンの方へ、ゆっくり近づいた。

「あれだけ大量の水を凍らすなんて、大した魔法力じゃない。でも、何で小屋が壊れたんだろう？」

アージャンは、相手に尋ねるといふより、自分自身に問い掛けるような口ぶりで呟いた。

一方、コーディーは、力を使い尽くしていた。彼は、たまらずその場で両膝をつく。

「へへ、クリスの奴が言うには、水は凍らすと膨らむんだと…だから、天井まで水が届くのを待つて、中の水を一気に凍らせてやった。それで、内側から押された小屋が、バラバラになったんだよ！」

クリスは、寒さが厳しい北辺の生まれなので、氷に対する知識があった。ちなみに、コーディーの生まれは、わりと温暖な地域だ。

「クリス、あとは頼んだぞ！」

この言葉を残して、コーディーは倒れた。水溜りに顔をつけたまま、ぴくりとも動かない。

アージャンは、腰の短刀を引き抜くと、動かなくなったコーディーに近づいた。

「どうやら、力を出し切ったみたいだね…これからあなたを殺すけど、僕を恨まないでね」

あと一歩だけ前に出れば、コーディーに止めを刺せる。アージャンは、その一歩を進もうとした。しかし、その一歩が踏み出せない。両足が、地面にくっついてしまったかのようなのだ。

「あれ？ 僕の足がどうかしちゃった」

アージャンの驚きは、恐怖へと変わる。彼は、短刀を持つ手を誰かに掴まれた。

「君に勝てる見込みはなかったのさ。僕たちを小屋に誘い込んだ時からね…」

アージャンの動きを止めたのは、クリスだった。彼は、まるで近所の友達にでも話し掛けるかのように、気軽に喋った。

「ずいぶんと手の込んだことをしたんだね…。だいぶお金が掛かったでしょう?」

そう言っている間に、クリスの右手が輝きだした。それは、アージャンを掴んでいる方の手だ。

「これから、君の体に僕の魔法力を流し込むよ。二度と悪さが出来ないようにね…」

クリスは、にっこり微笑んでいる。一方、微笑まれてるほうとしては、自分の身に何が起きるのが、非常に心配だ。

「僕はどうなるのでしょうか?」

アージャンは、クリスに対してえらく弱気な態度を取った。ちょっと前までの勝ち誇った様子とは大違いだ。

クリスは、小さい子に言い聞かせるかのように語りかけた。

「特別に教えてあげるね。僕の魔法力は、君の体を止められるの。

間接的に使つと手足ぐらいまでだけど、直接流し込めば、心臓を止められるよ」

アージャンは、その言葉を聞くと、目の前が暗くなった。

「えーっ、僕を殺すの!」

優しいクリスは、「お前のほうが先に殺そうとしたんだろ!」などとコーディーが言いそうなことは言わない。ただ、なだめるように言い聞かせた。

「大丈夫、ちつとも痛みは感じないから」

アージャンに取っては、そういう問題じゃない。

「どうか、命ばかりはお助けを! 今から黒魔術会を辞めて、ギル

ドへ入ります！」

クリスは、アージャンの顔を覗き込んだ。きらきらと輝くつぶらな瞳に、大きく頷く。

「僕はあるり殺生は好きじゃないんだ。君の事を信じたいけど……」
クリスは、首を傾げて考え込んだ。彼は、陶器で作ったお人形さんのように愛らしかった。そのため、とても戦闘中とは思えない。

「どうしてギルドに入りたいの？」

クリスは、顔いっぱい笑顔を作って質問する。質問されたアージャンのほうは、その答えに命が掛かっているので、どうしても顔が引きつってしまふ。

「黒魔術会は、いくら仕事をしてもお金を貰えないんです。だから、貧乏で、故郷の両親にはいつまで経っても楽をさせることができない……」

アージャンは、俯うつむき加減になった。

クリスは、その話しを信じているらしく、目を潤ませていた。

「お父さん、お母さんのお国は？」

「アシス鉱山のあるナントです」

「そう、そうなの……僕もあの辺……苦労してるんだね」

クリスの声は、涙声になっている。

アージャンは、ハンカチで目を覆いながら、話しを続けた。

「父は、狭い坑道の中で重労働。母は夜なべして手袋編んでいます」

クリスは、アージャンをすっかり信用してしまっただけらしい。

「君をギルドへ紹介してあげるね。早くお金を貯めて、両親を呼んであげるといい」

クリスは、アージャンの手を放した。

クリスから解放されたアージャンは、このお人好しのバカを、そのまま刺してやるうかと思っていた。しかし、彼自身も、本当に黒魔術会からギルドのほうへ移りたいと思っていたので、短刀を鞘に収めた。

こうして、アージャンは、黒魔術会を裏切り、ギルドのほうへ寝

返った。

第二章 終わり

この物語「マイアール皇国記 魔人復活編」を読んでいた方が、
難うございます。掲載されているのは、
第二章のみです。

エルシークとカイルの出会いと冒険を描く第一章&ここに掲載さ
れている第二章&感動と興奮の結末の第三章を収めた書籍が、全国
の書店から注文できます。

タイトル マイアール皇国記 魔人復活編

出版社 文芸社

価格 税込み1050円

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1713b/>

マイアール皇国記 魔人復活編（二章のみ）

2008年11月7日07時05分発行